

# ダイジェスト版

## 高校生活と進路に関する調査2018 －高校生活の振り返り・高校生の成長－

### － 目次 －

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて .....	2
I. 高校生活の振り返り－「高校生活と進路に関する調査2018」結果から－ .....	3～9
調査概要、基本属性、データを読む際の注意点	
①さまざまな活動への取り組み	
②進路選択の悩み	
③進路選択の主体性	
④大学受験への考え	
⑤希望進路の実現度	
⑥自己評価	
II. 高校生の成長－高校生パネルデータの分析結果から－ .....	10～15
高校生パネルデータの枠組み、基本属性	
①勉強時間	
②高校生活の満足度が高い高校生の特徴	
③成績が上がった高校生の特徴	

# 「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。

「高校生活と進路に関する調査2018」は、この研究プロジェクトの一環として行った調査です。

## ■研究プロジェクトの特徴

### 1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

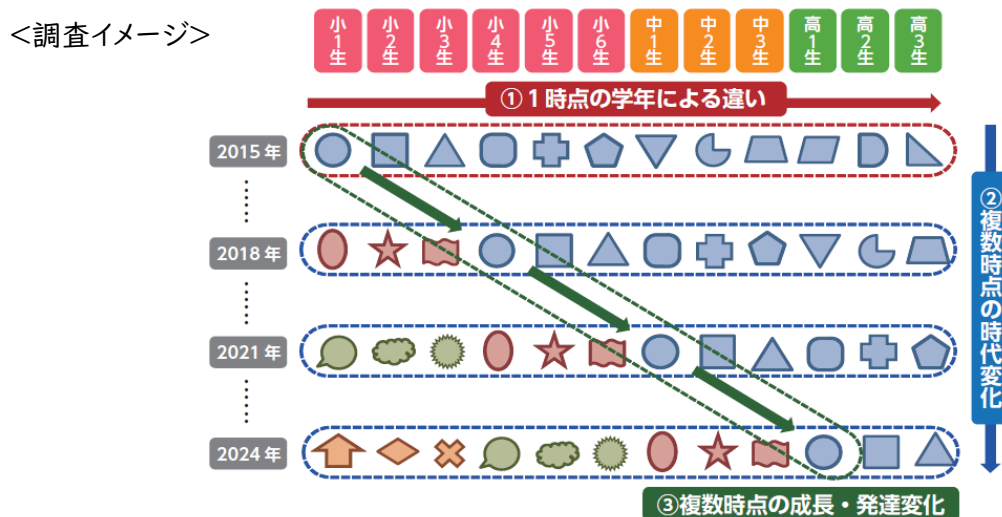
研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施します。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます（図中②）。

### 2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査します。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

### 3. 子どもの生活と学習にかかわる意識や実態を幅広く、詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広く尋ねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などを尋ねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。



※ 研究プロジェクトの詳細は、最後のページのWEBサイトよりご覧ください。

#### [本ダイジェスト版について]

- 本文中では、高校3年生を「高3生」などと示している。
- 図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

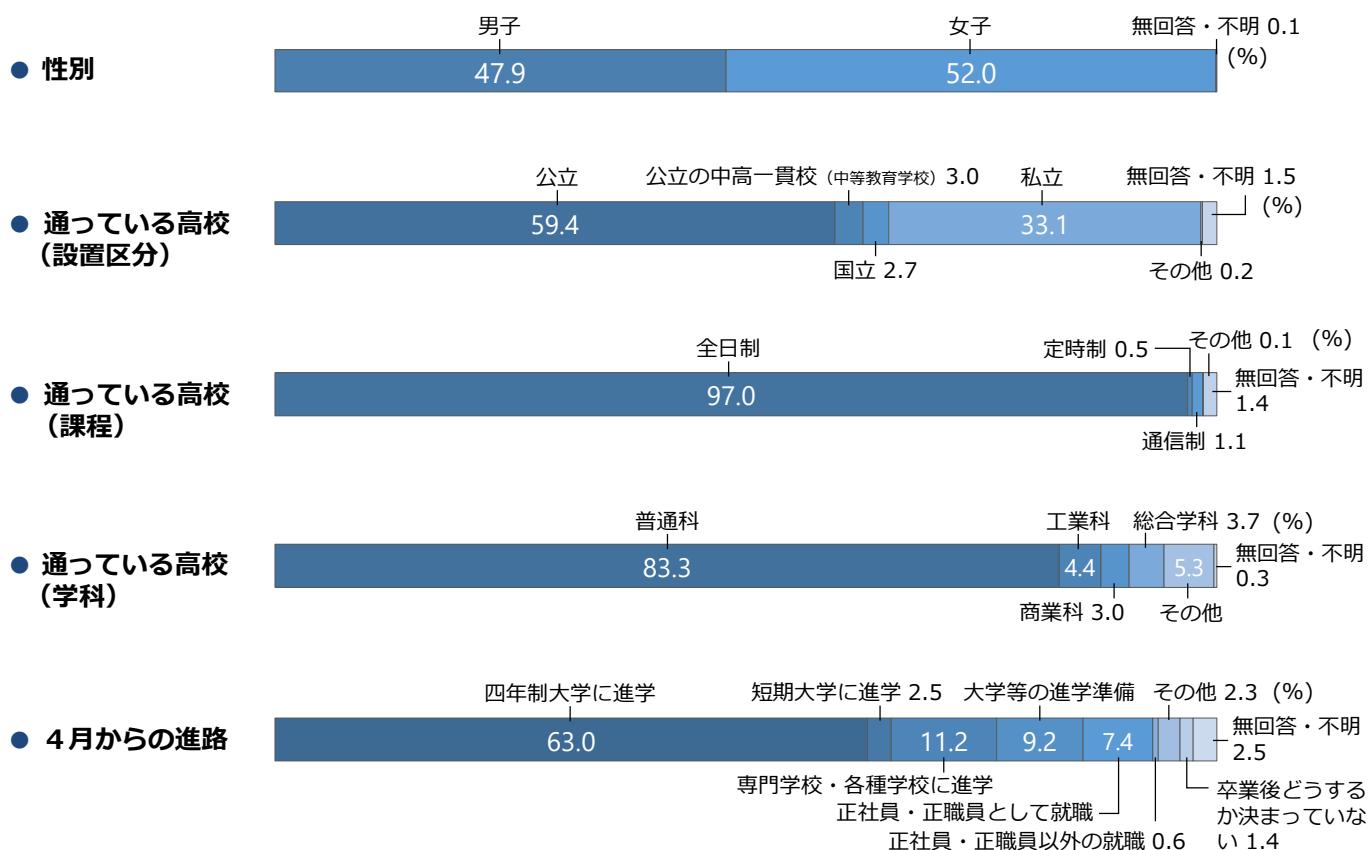
# I. 高校生活の振り返り

－「高校生活と進路に関する調査2018」結果から－

## 「高校生活と進路に関する調査2018」調査概要

- **調査テーマ** 高校3年生の学習、生活、進路選択についての意識と実態
- **調査時期** 2018年3月～4月上旬
- **調査方法** 郵送法による自記式質問紙調査
- **調査対象** 全国の高校3年生の子ども 975名（有効回収率69.6%）  
※研究プロジェクトの「調査モニター」のうち2018年3月時点の高校3年生1,401名に調査票を配布。
- **調査項目** さまざまな活動への取り組み状況／勉強時間／成績（学校・模擬試験）／4月からの進路／進路を意識した時期／進路決定の参考にしたこと／進路決定に影響した人／進路選択時の悩み／大学でやりたいこと／大学受験に対する考え／入試方法／希望した進路の実現度／進路選択に対する主体性／高校生活の振り返り／将来展望／「自立」に関する自己評価／授業料無償化への意見 など

## 基本属性



[注1] 通っている高校（設置区分）、通っている高校（課程）は、「子どもの生活と学びに関する親子調査2017」の保護者の回答（853名）。

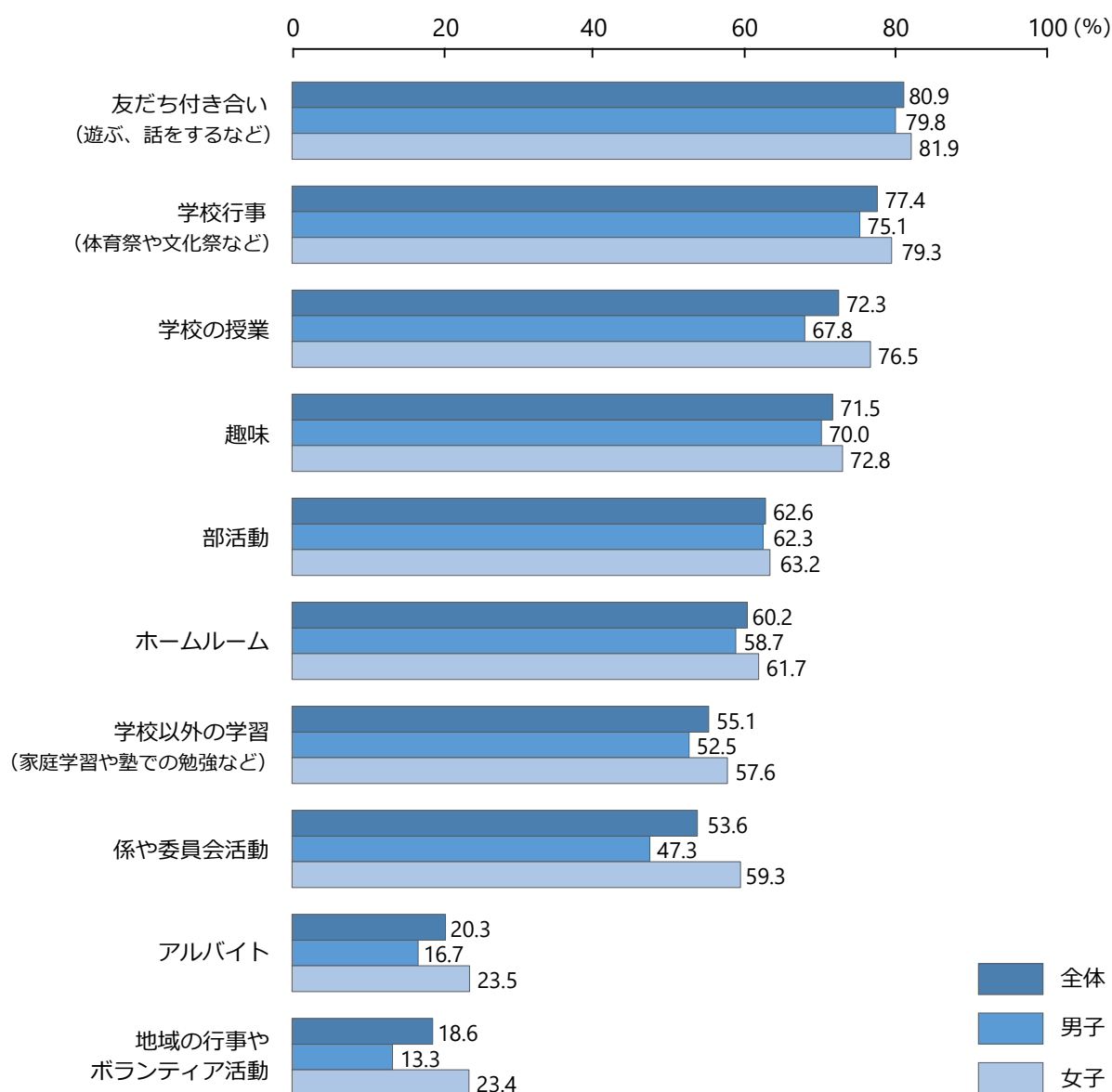
[注2] 4月からの進路は、「あなたのこの4月からの進路は、次のうちどれですか」への回答。「四年制大学に進学（医学、歯学など六年制課程や海外の大学を含む）」を「四年制大学」、「大学等の進学準備（受験浪人、予備校への進学を含む）」を「大学等の進学準備」と示している。

## 女子のほうが、高校生活のさまざまな活動に「積極的」に取り組んだ傾向

全体では、約8割の高3生が、「友だち付き合い」に「積極的」（「とても積極的」+「まあ積極的」、以下同様）に取り組んだと回答しており、「学校行事」「学校の授業」「趣味」に「積極的」だった高3生も7割台である。性別では、全体的に女子のほうが、さまざまな活動に「積極的」に取り組んでおり、特に、「学校の授業」は男子に比べて8.7ポイント、「係や委員会活動」は12.0ポイント高い。

Q あなたは高校生活において、次のことにどれくらい積極的に取り組みましたか。

図 I - 1 さまざまな活動への取り組み状況（全体、性別）



[注1] 「とても積極的」+「まあ積極的」の%。

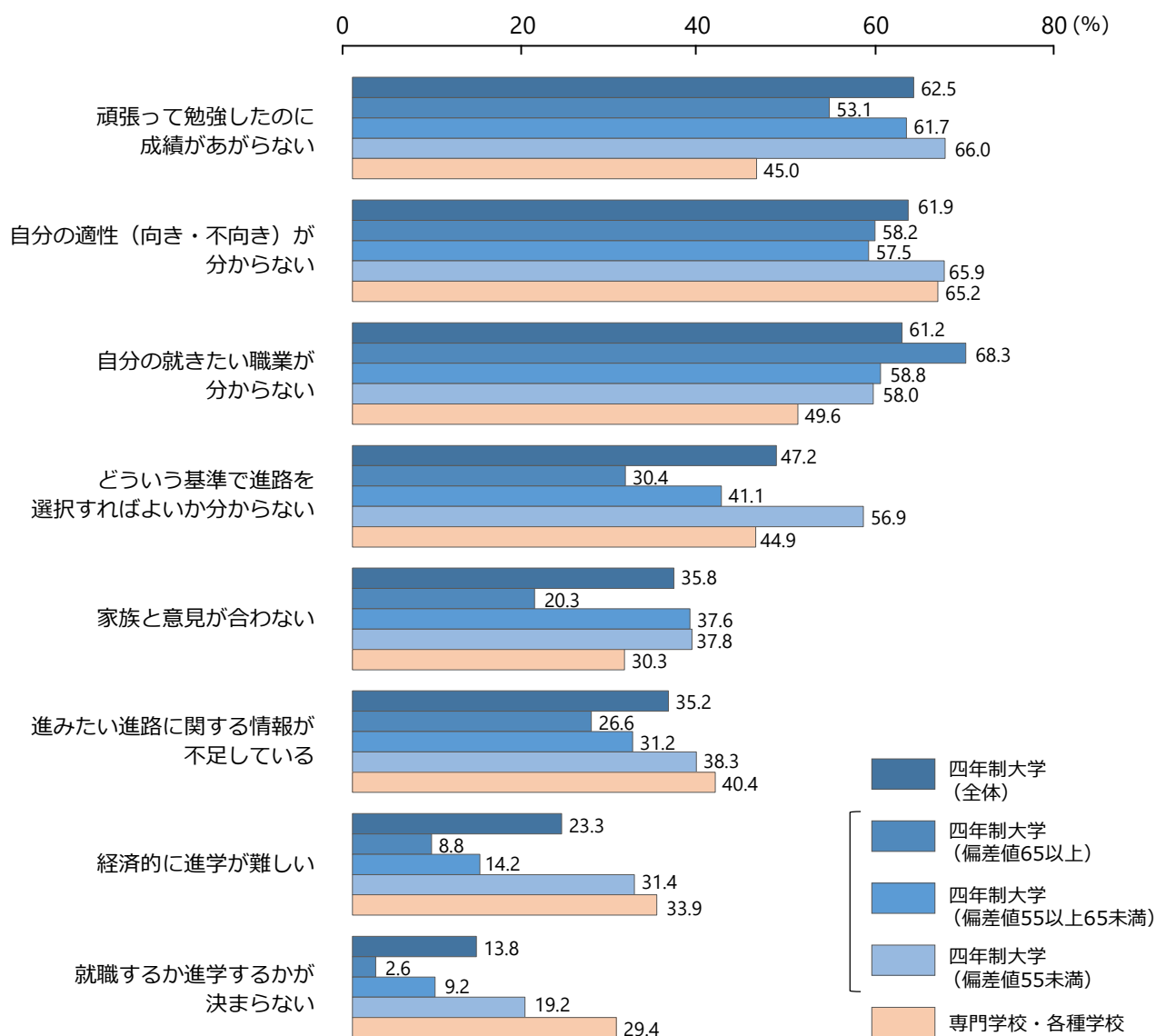
[注2] 「部活動」「係や委員会活動」「アルバイト」は「していない」の選択肢を含めて算出した数値。

## 四年制大学進学者の約6割が、「成績があがらない」ことや、「自分の適性」「就きたい職業」が分からないことに悩んだと回答

高3生全体でみると、進路選択の悩みの上位3つは、「頑張っても勉強したのに成績があがらない」「自分の適性が分からない」「自分の就きたい職業が分からない」である（「よくあった」+「ときどきあった」、以下同様）。このうち、偏差値65以上の大学に進学する高3生は、「自分の就きたい職業が分からない」がもっとも高く（68.3%）、偏差値55未満の大学に進学する高3生は、「頑張っても勉強したのに成績があがらない」がもっとも高い（66.0%）。

Q あなたは進路選択にあたって、次のことに悩んだことがありましたか。

図 I - 2 進路選択にあたって悩んだこと（進路別、進学する大学の偏差値別）



【注1】「よくあった」+「ときどきあった」の%。

【注2】4月からの進路を「四年制大学に進学」と回答した高3生について、回答者が記入した大学・学部・学科名をもとに大学の偏差値を特定し、3グループ（偏差値65以上/55以上65未満/55未満）に分類した。特定には「2017年度第3回ベネッセ・駿台マーク模試・3年生11月回の偏差値（B判定基準【合格可能性60%以上80%未満】）」を使用した。

## 高3生の9割以上が、進路を「自分の意思で」選択した、「真剣に考えた」と回答

高3生の9割以上が、「自分の意思で進路を選択した」「自分の進路について真剣に考えた」（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」、以下同様）と回答し、進路選択を主体的に行っている。一方で、「できる限り高い進路の目標を設定して挑戦した」は7割弱にとどまっている。進路別で見ると、専門学校・各種学校に進学する高3生が、もっとも主体的に進路選択を行っている（「高群」3割強）。性別では、女子のほうが主体的で、「高群」の比率は男子に比べて14.2ポイント高い。

Q あなたが進路を決めるにあたって、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図 I - 3 - 1 進路選択の主体性と目標設定（全体）

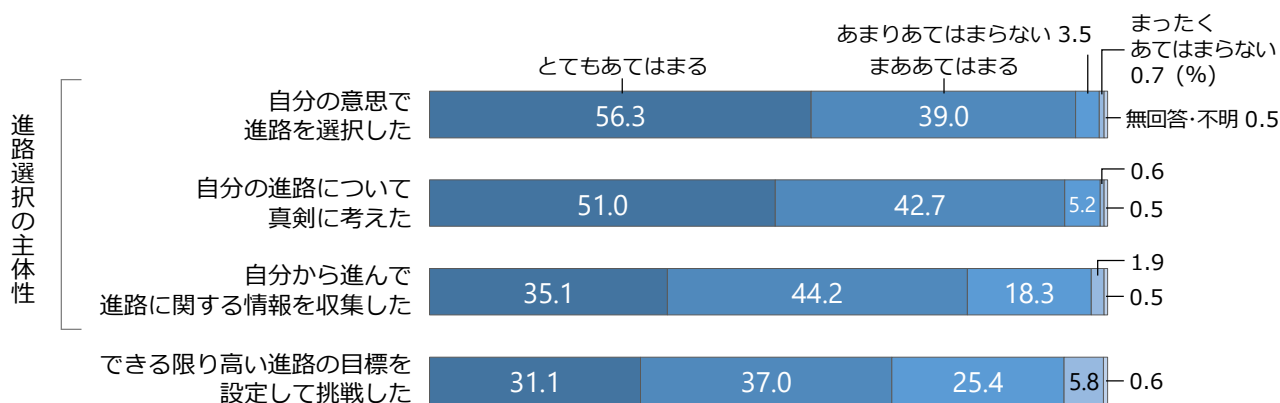


図 I - 3 - 2 進路選択の主体性（進路別）

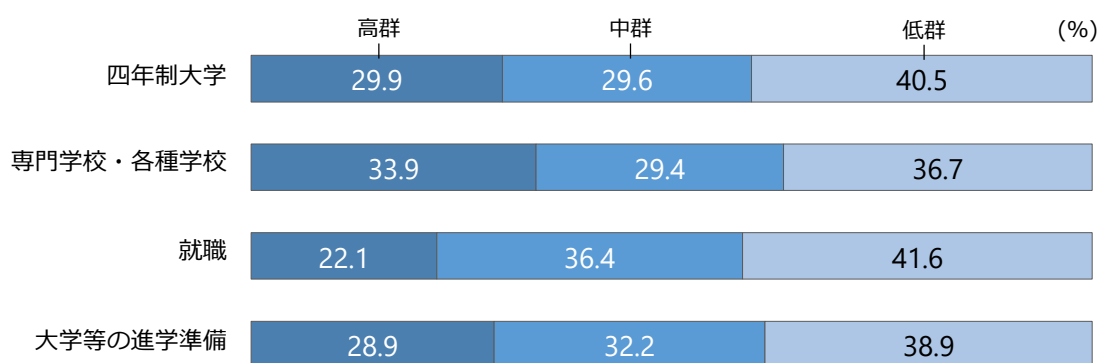
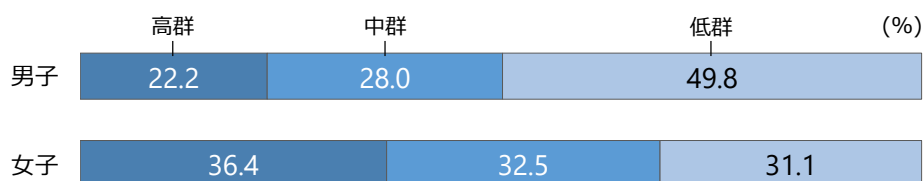


図 I - 3 - 3 進路選択の主体性（性別）



[注1] 就職は、「正社員・正職員として就職」「正社員・正職員以外の就職」と回答した高3生の数値（図 I - 3 - 2）。

[注2] 進路選択の主体性の「高群」「中群」「低群」は、図 I - 3 - 1 に示した「自分の意思で進路を選択した」「自分の進路について真剣に考えた」「自分から進んで進路に関する情報を収集した」の3項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点として合計得点を算出し、人数で3等分したもの（図 I - 3 - 2～3）。

## 大学に進学する高3生の86%が、受験を「成長の機会だった」と感じている

大学に進学する高3生の86%が、大学受験を「成長の機会だった」と回答している。また、7割以上が、入試で「学力だけでなく多様な能力を評価すべき」と考えている。大学でしたいことをたずねたところ（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」）、9割以上の項目が多く、専攻する分野だけでなく、幅広い知識や教養、将来のキャリアに役立つ力、友人関係なども希望している。一方で、「大学で何に力を入れるかこれから考えたい」も7割以上である。

Q あなたは大学受験について、どう思いますか。

図 I - 4 - 1 あなたにとっての大学受験（大学進学者全体）

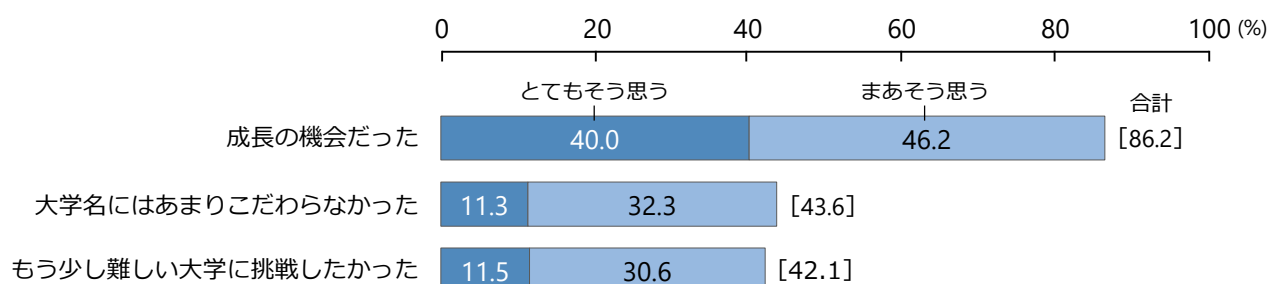
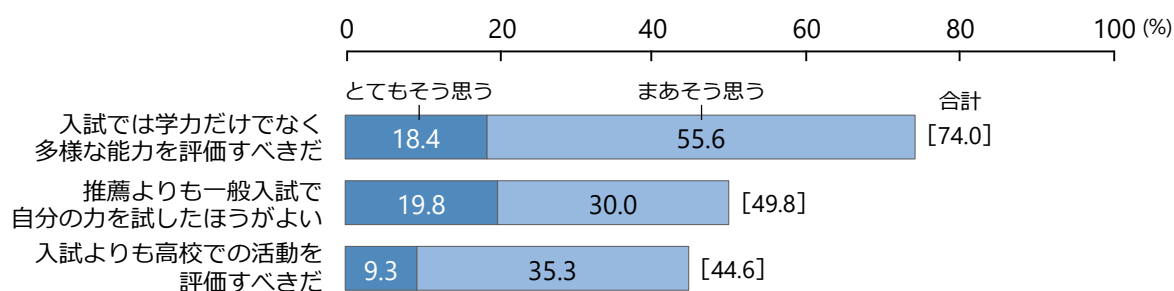
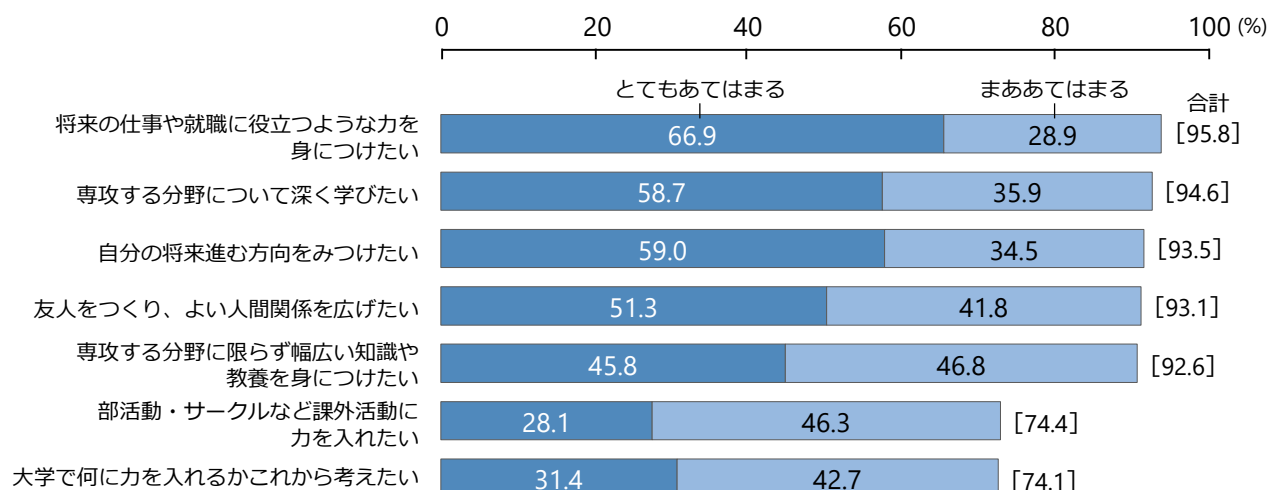


図 I - 4 - 2 大学受験に対するあなたの考え（大学進学者全体）



Q 進学先の大学に入学するにあたって、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図 I - 4 - 3 大学でしたいこと（大学進学者全体）



[注1] 4月からの進路を「四年制大学に進学」「短期大学に進学」と回答した高3生の数値（図I-4-1～3）。

[注2] [ ]内は「とてもそう思う（あてはまる）」+「まあそう思う（あてはまる）」の%（図I-4-1～3）。

## 「もっとも希望していた」進路を実現した高3生は6割弱

4月からの進路について、「もっとも希望していた進学先や就職先だった」と回答した高3生は6割弱（58.1％）で、「他に行きたい進学先や就職先があった」が約3割である。進路別では、専門学校・各種学校に進学した高3生の希望進路実現度が高く（「もっとも希望していた」が75.2％、以下同様）、次いで、四年制大学進学者が55.7％である。就職する高3生は、約2割（21.8％）が「進学、就職先にはこだわらなかった」と回答している。入試方法別では、AO入試の高3生の希望進路実現度がもっとも高く（80.5％）、一般入試がもっとも低い（45.8％）。

Q この4月からの進路について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

図 I - 5 - 1 希望進路の実現度（全体）

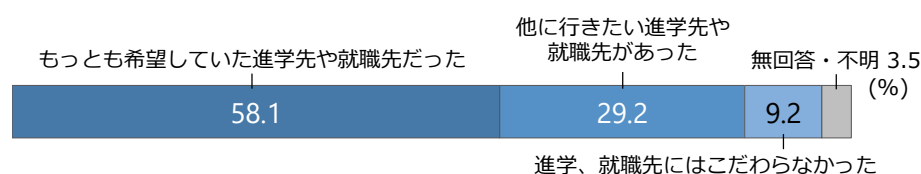


図 I - 5 - 2 希望進路の実現度（進路別）

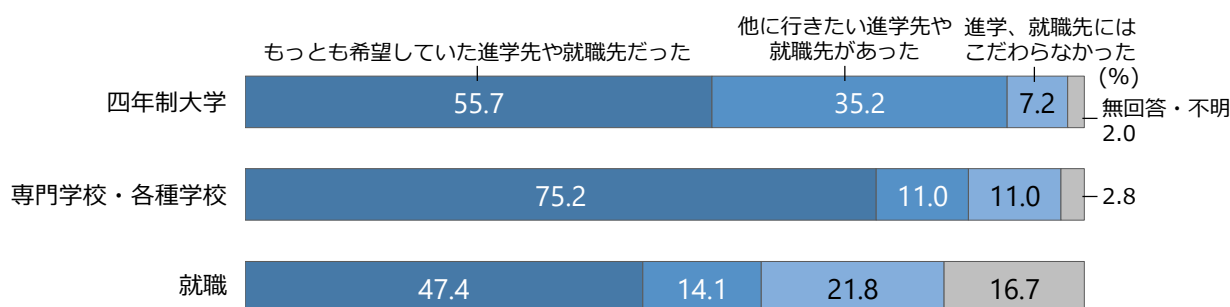
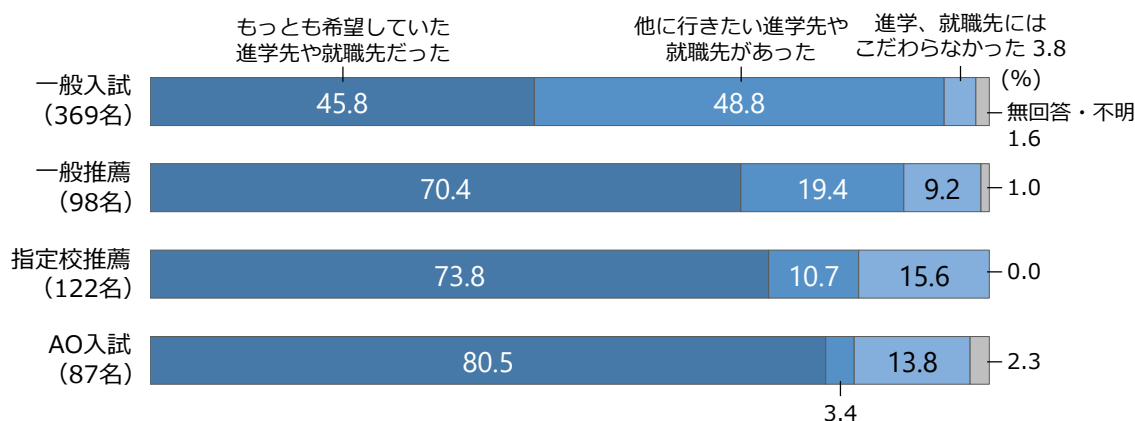


図 I - 5 - 3 希望進路の実現度（入試方法別）



[注1] 就職は、「正社員・正職員として就職」「正社員・正職員以外の就職」と回答した高3生の数値（図 I - 5 - 2）。

[注2] 入試方法は、進学先の大学・学校に入学するための入学試験の方法をたずねたもの。「一般入試」には大学入試センター試験の利用も含む（図 I - 5 - 3）。



## 8~9割の高3生が、高校3年間での成長を感じ、満足している

「高校3年間で自分は成長した」「高校3年間の生活に満足している」の比率（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」、以下同様）は、それぞれ88.1%、83.3%と高く、多くの高3生が、高校3年間での成長を感じ、高校生活に満足している。性別でみると、女子は男子に比べて、「自分で何か目標を設定して達成した」の比率が10ポイント以上高い。また、進路選択の主体性別では、すべての項目で、主体性「高群」のほうが肯定率が高く、高校生活に充実感を持っているようだ。

Q 高校生活の3年間を振り返って、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図 I - 6 - 1 高校生活に対する自己評価（全体）

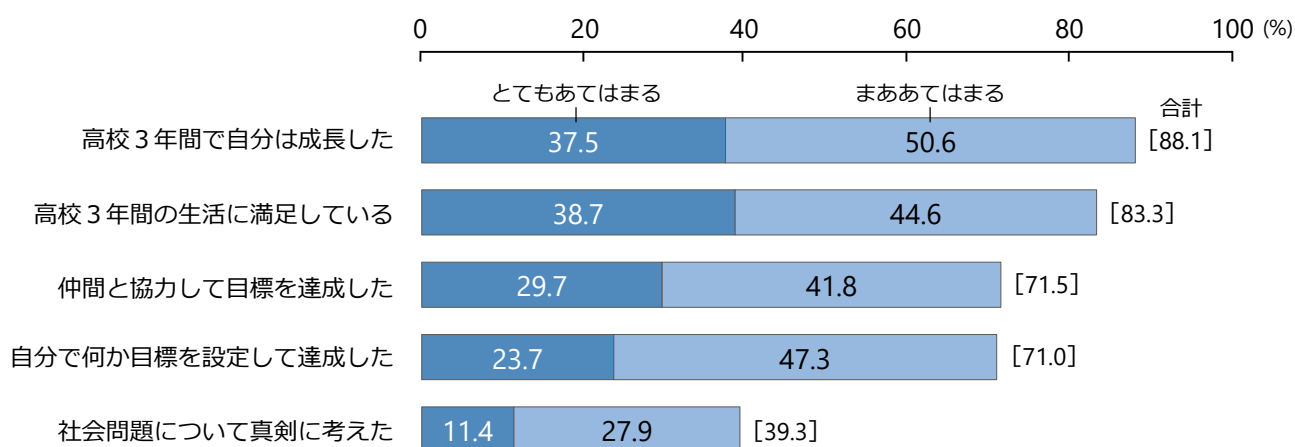
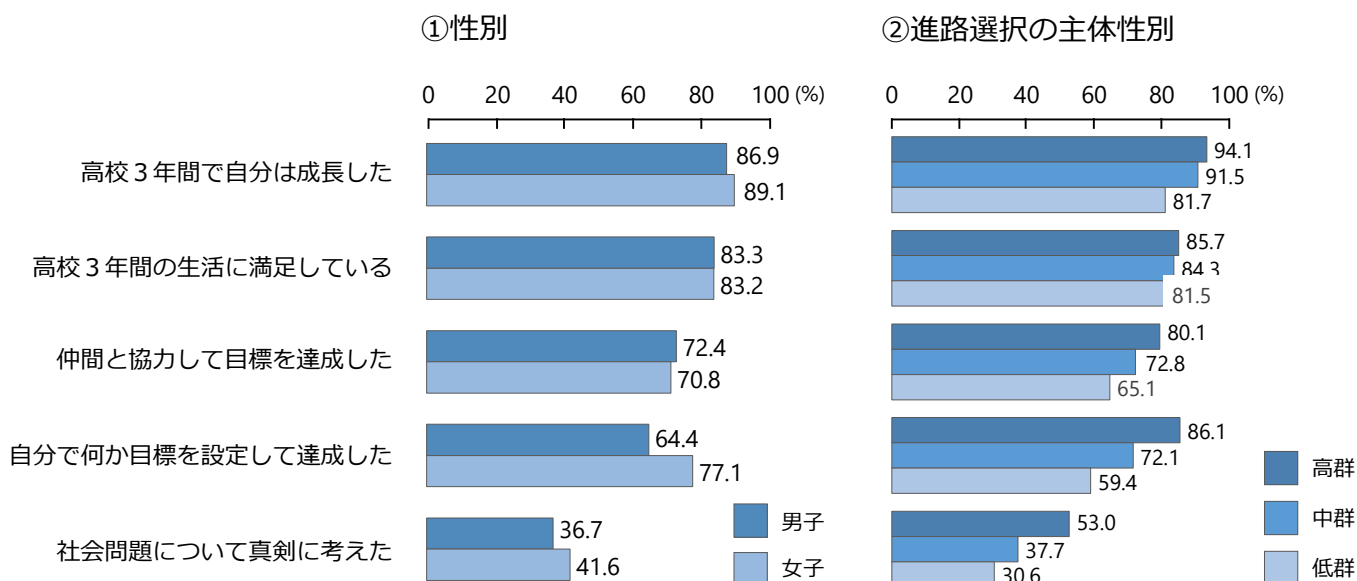


図 I - 6 - 2 高校生活に対する自己評価（性別、進路選択の主体性別）



[注1] [ ] 内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%（図 I - 6 - 1）。

[注2] 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%（図 I - 6 - 2）。

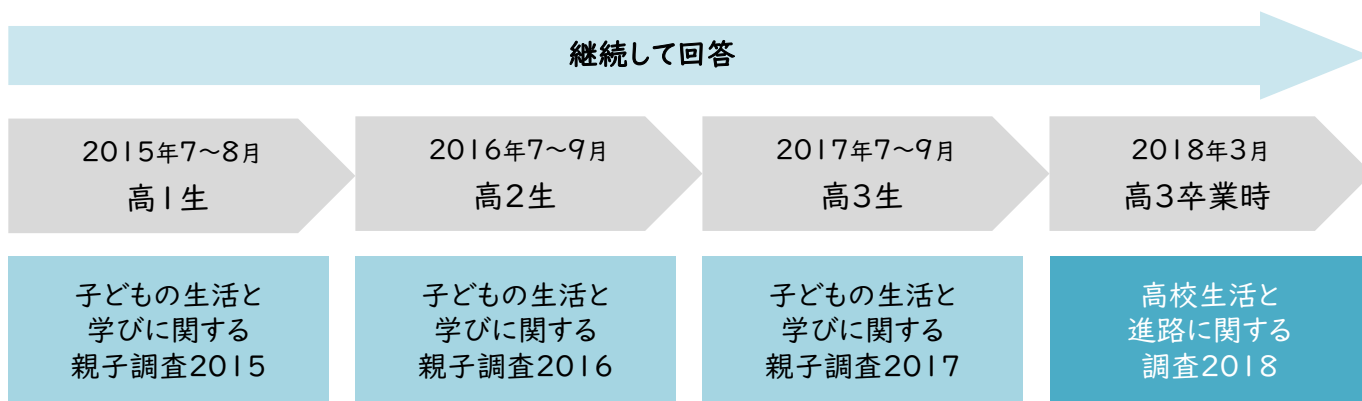
[注3] 進路選択の主体性の分類は、P.6の[注2]参照。

## Ⅱ. 高校生の成長

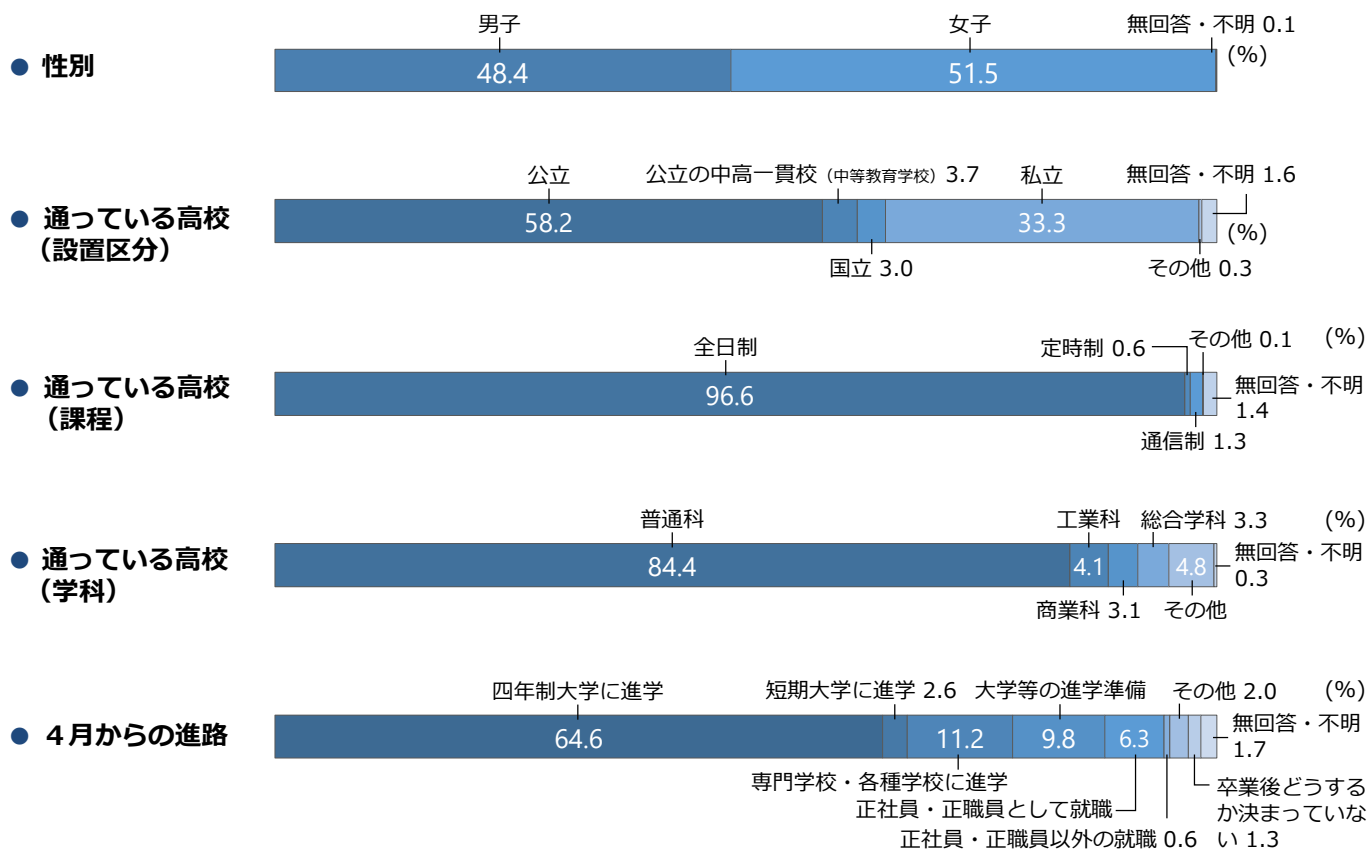
－ 高校生パネルデータの分析結果から－

### 高校生パネルデータの枠組み

P.10～15は、「高校生活と進路に関する調査」に加えて、研究プロジェクト(P.2)で行っている「子どもの生活と学びに関する親子調査」に、高1生から高3生の卒業時まで継続して回答した高校生703名を分析し、高校3年間の生活・学習の変化や成長を明らかにする。



### 基本属性



[注] 4月からの進路は、「あなたのこの4月からの進路は、次のうちどれですか」への回答。「四年制大学に進学（医学、歯学など六年制課程や海外の大学を含む）」を「四年制大学」、「大学等の進学準備（受験浪人、予備校への進学を含む）」を「大学等の進学準備」と示している。

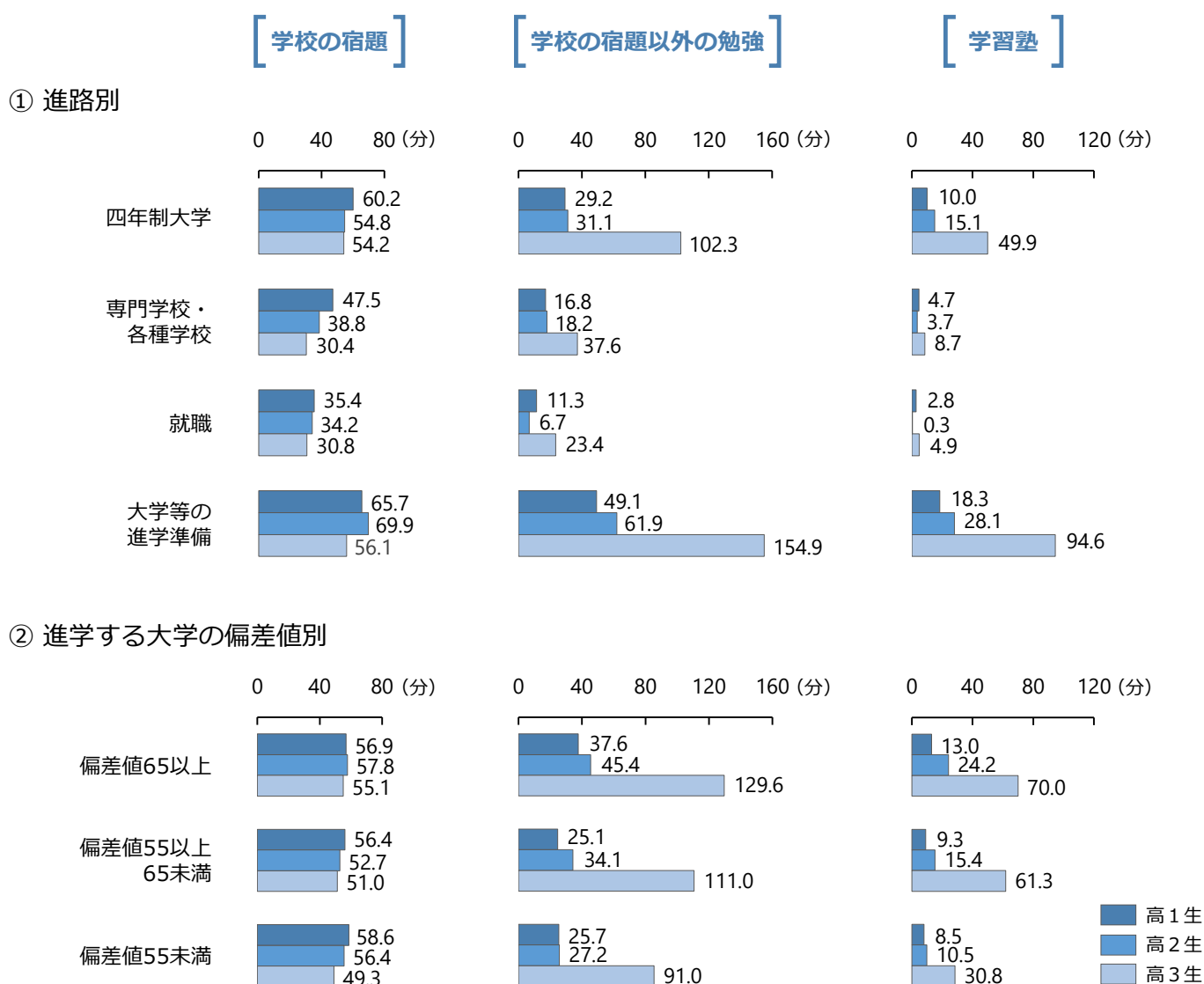
進路や進学する大学によって、高3生のときの学習時間に差がみられる

「学校の宿題」をする時間は、どの学年でも、四年制大学や大学等の進学準備の子どもは60分前後、就職の子どもは30分台と、学年や進路・進学先による違いが比較的小さい。一方で、「学校の宿題以外の勉強」と「学習塾」の時間は、高1生、高2生時に比べて、高3生時は2倍以上になる。高3生時の勉強時間（「学校の宿題」+「学校の宿題以外の勉強」+「学習塾」）は、四年制大学に進学する子どもは約3時間半、大学等の進学準備の子どもは約5時間である。



あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

図Ⅱ-1 勉強時間（学年別・進路別、進学する大学の偏差値別／1日あたりの平均時間）



[注1] 高1生、高2生、高3生は、それぞれ、「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」、同「親子調査2016」、同「親子調査2017」の回答。

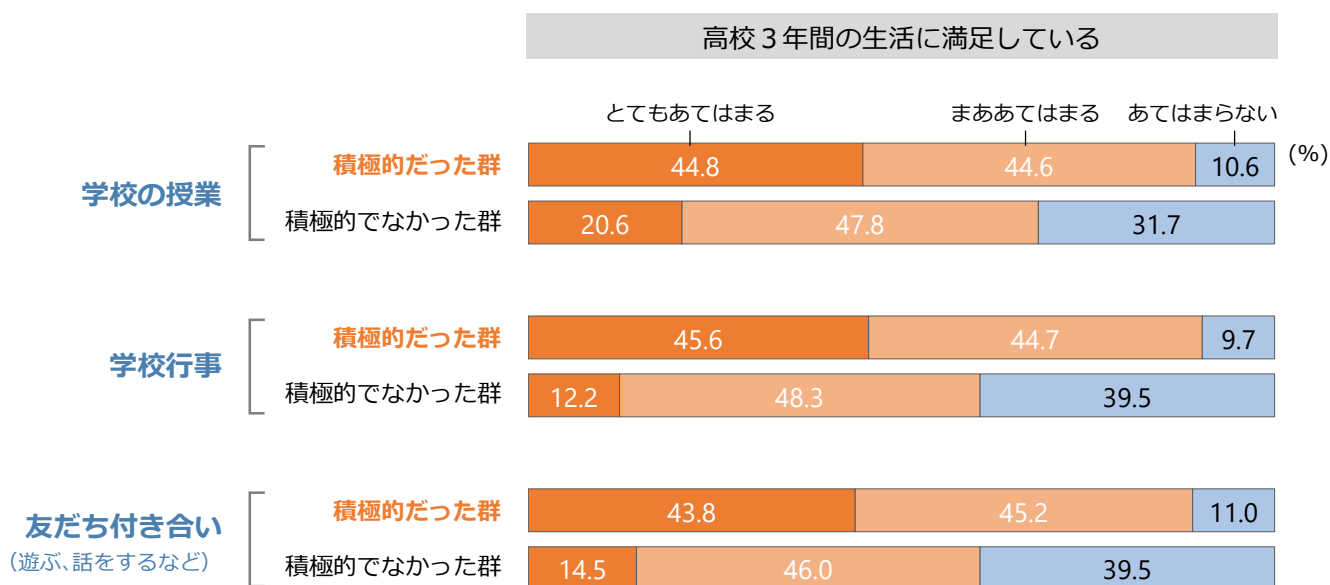
[注2] 「学校の宿題」をする時間、「学校の宿題以外の勉強」をする時間の平均は、「しない」を0分、「15分」を15分、「4時間より多い」を5時間のように置き換えて、無回答、不明を除いて算出している。「学習塾」の時間は、学習塾に「行っていない」人を0分として、1週間の回数×1回あたりの時間を7で割って算出している。

[注3] 偏差値の分類はP.5の[注2]参照。

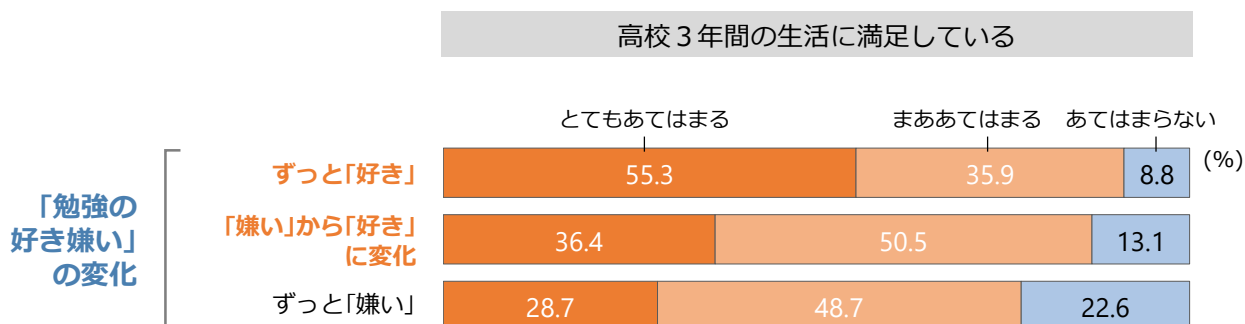
学校行事や友だち付き合いに積極的だった高校生ほど、高校生活に満足している

高校生活の過ごし方によって、高校卒業時の満足度（「満足している」（とてもあてはまる+まああてはまる）が異なるかをみると、「学校の授業」のほか、「学校行事」や「友だち付き合い」に積極的だった子どもほど満足度が高い（「積極的だった群」約9割、「積極的でなかった群」約6～7割）。また、高1生から高3生にかけて、勉強が「ずっと『好き』」だった子どもや「『嫌い』から『好き』に変化」した子どもは、勉強が「ずっと『嫌い』」の子どもに比べて満足度が高い。

図Ⅱ-2-1 高校生活の満足度（さまざまな活動への積極性別）



図Ⅱ-2-2 高校生活の満足度（「勉強の好き嫌い」の変化別）



[注1] 「高校3年間の生活に満足している」は、図Ⅰ-6-1（P.9）で示した項目。「あてはまらない」は「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」の%。無回答・不明は除外している（図Ⅱ-2-1～4）。

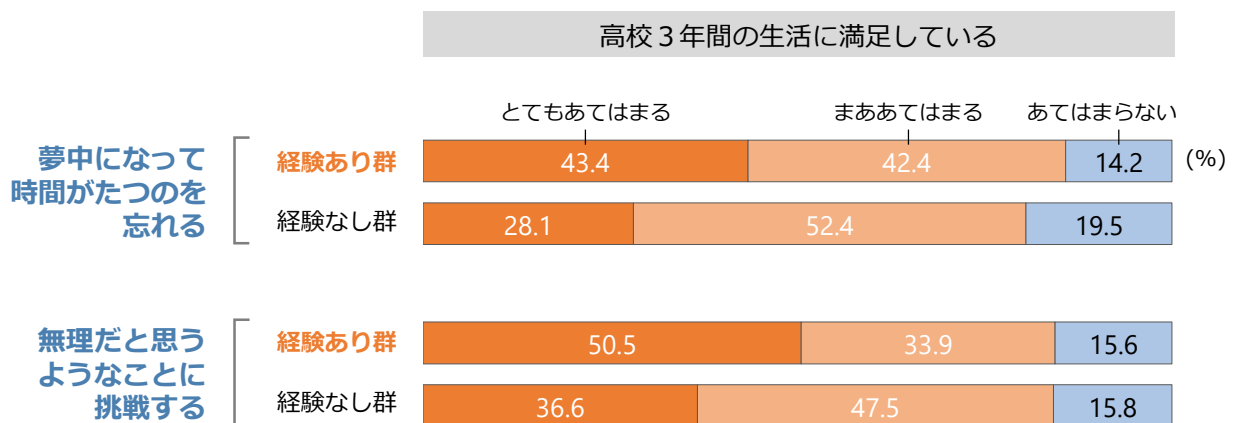
[注2] 「積極的だった群」は、図Ⅰ-1（P.4）で示した項目に「とても積極的」「まあ積極的」と回答した子ども、「積極的ではなかった群」は「あまり積極的でない」「まったく積極的でない」と回答した子ども（図Ⅱ-2-1）。

[注3] 「勉強の好き嫌い」は、「勉強がどれくらい好きか」をたずねた質問に、「とても好き」「まあ好き」と回答した子どもを「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を「嫌い」として、2015～2017年（高1生～高3生）の3時点の変化をみた。「好き」から「嫌い」に変化した子ども、「好き」→「嫌い」→「好き」など変化が不安定な子どもは省略している（図Ⅱ-2-2）。

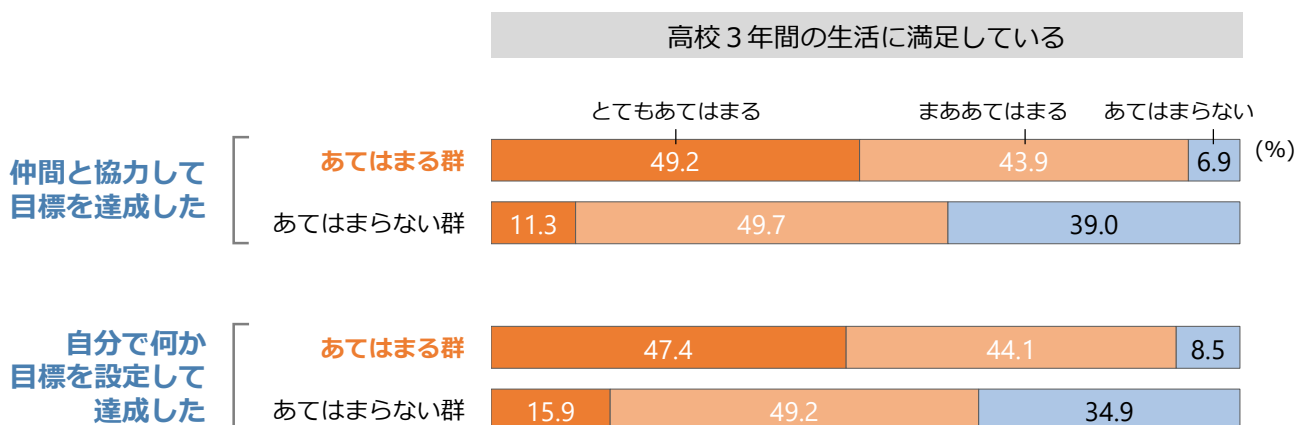
目標達成の経験や夢中になった経験を持つ高校生ほど、高校生活に満足している

高校生活の経験との関連をみると、「夢中になって時間がたつのを忘れる」「無理だと思ふようなことに挑戦する」という経験がある子どもは、高校生活の満足度が高い傾向である（「とてもあてはまる」は「経験あり群」4～5割台、「経験なし群」2～3割台）。また、「自分で何か目標を設定して達成した」「仲間と協力して目標を達成した」という経験がある子どもは、高校生活の満足度が高く、経験がない子どもとの差が大きい（「あてはまる群」9割強、「あてはまらない群」6割台）。

図Ⅱ－2－3 高校生活の満足度（夢中になる経験・挑戦する経験の有無別）



図Ⅱ－2－4 高校生活の満足度（目標を達成したかどうか別）



【注1】 高1生の夏から高2生の夏（調査時期）までの1年くらいの間に経験したかどうかをたずねた結果（図Ⅱ－2－3）。

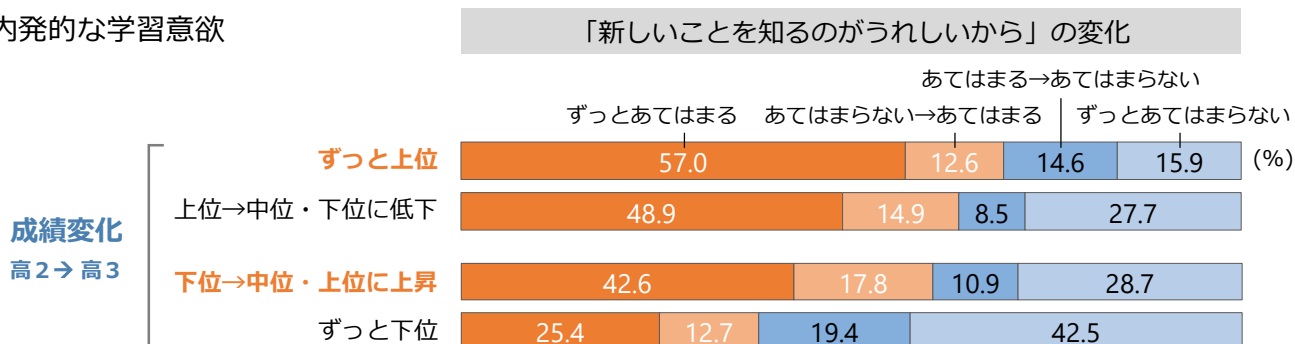
【注2】 「あてはまる群」は、図Ⅰ－6－1（P.9）で示した項目に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した子ども、「あてはまらない群」は「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した子ども（図Ⅱ－2－4）。

成績が「ずっと上位」や「上昇」の子どもは、内発的な学習意欲を持って勉強している  
(勉強するようになっている)

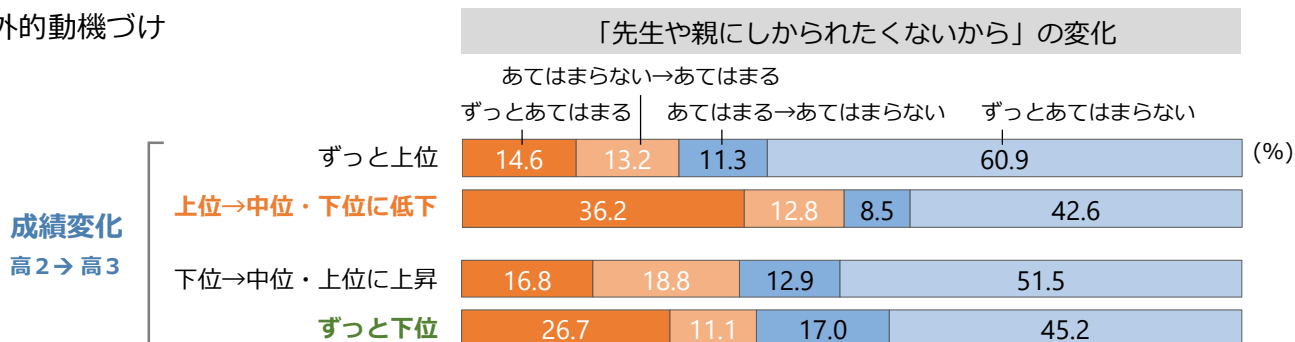
高校生活の成績変化に注目して子どもの特徴をみると、成績が「ずっと上位」や「上昇」の子どもは、「新しいことを知るのがうれしいから」勉強している比率が高く(「ずっとあてはまる」は「ずっと上位」57.0%、「上昇」42.6%)、特に、「上昇」の子どもは、そのように変化した比率が高い(「あてはまらない→あてはまる」に変化17.8%)。また、成績が「ずっと上位」や「上昇」の子どもは、将来の目標が「ずっと不明確」の比率が低く、「将来の目標がはっきりしている」比率が高い(「ずっと明確」+「不明確→明確」に変化は「ずっと上位」59.2%、「上昇」53.8%)。

図Ⅱ-3-1 学習動機づけの変化(成績の変化別)

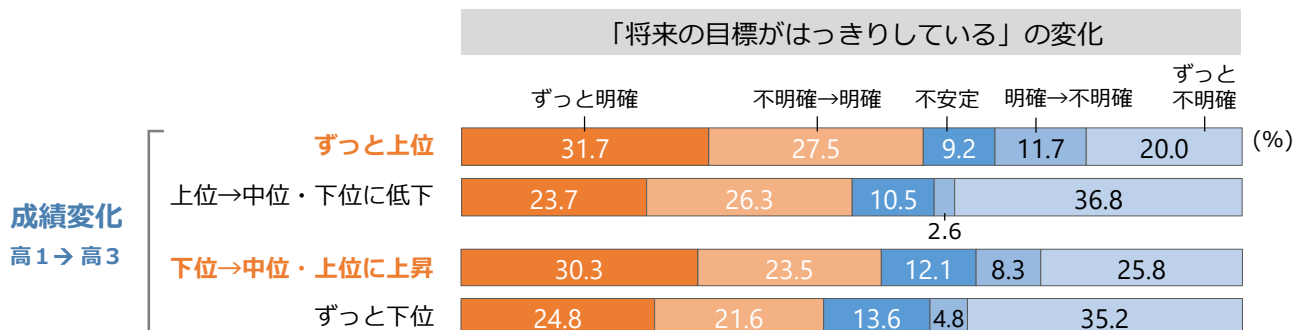
① 内発的な学習意欲



② 外的動機づけ



図Ⅱ-3-2 将来目標の有無の変化(成績の変化別)



[注1] 成績は子どもの自己評価。国数理社英の5教科に、各5段階で回答してもらったものを合計し、人数で上中下に3等分した。図Ⅱ-3-1、3はその高2→高3の変化、図Ⅱ-3-2は高1→高3の2時点の変化。中位→上位・中位・下位は省略している。

[注2] 勉強する理由(学習動機づけ)は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した子どもを「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した子どもを「あてはまらない」として、高2→高3の変化をみた(図Ⅱ-3-1)。

[注3] 将来目標の有無は、「将来の目標がはっきりしている」かどうかをたずねた質問に、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した子どもを「明確」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した子どもを「不明確」として、高1→高2→高3の変化をみた。「不安定」は「明確→不明確→明確」のように変化した子ども(図Ⅱ-3-2)。

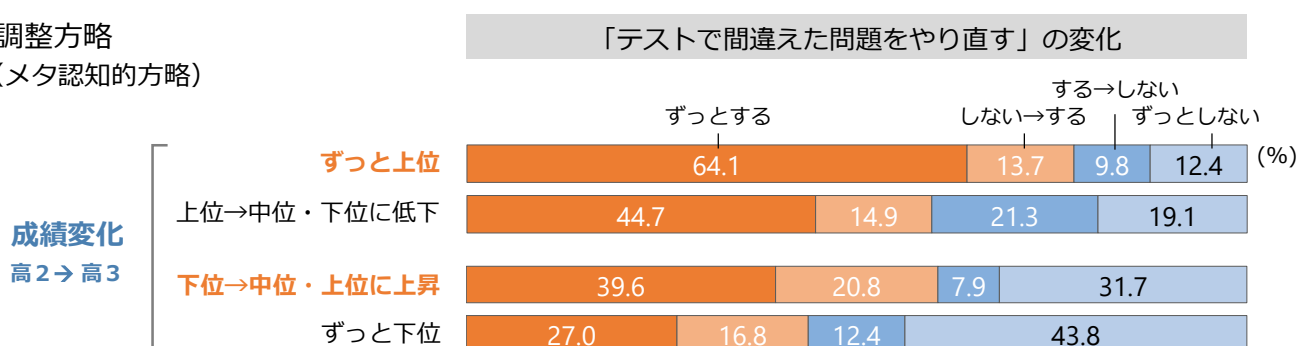
成績が「ずっと上位」や「上昇」の子どもは、メタ認知的方略などの勉強方法を活用している（活用するようになっている）

成績が「ずっと上位」や「上昇」の子どもは、「テストで間違えた問題をやり直す」、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」などの勉強方法（メタ認知的方略）を活用している比率が高い（「ずっと上位」の子どもは「低下」の子どもに比べて、「上昇」の子どもは「ずっと下位」の子どもに比べて高い）。また、成績が「上昇」した子どもは、これらの勉強方法を活用するようになった比率も高い（「しない→する」に変化は2割前後）。これについて、進学する大学の偏差値別にみると、偏差値65以上の大学に進学する子どもは、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」という勉強方法を継続的に活用している（「ずっとする」88.1%）。

図Ⅱ-3-3 勉強方法の変化（成績の変化別）

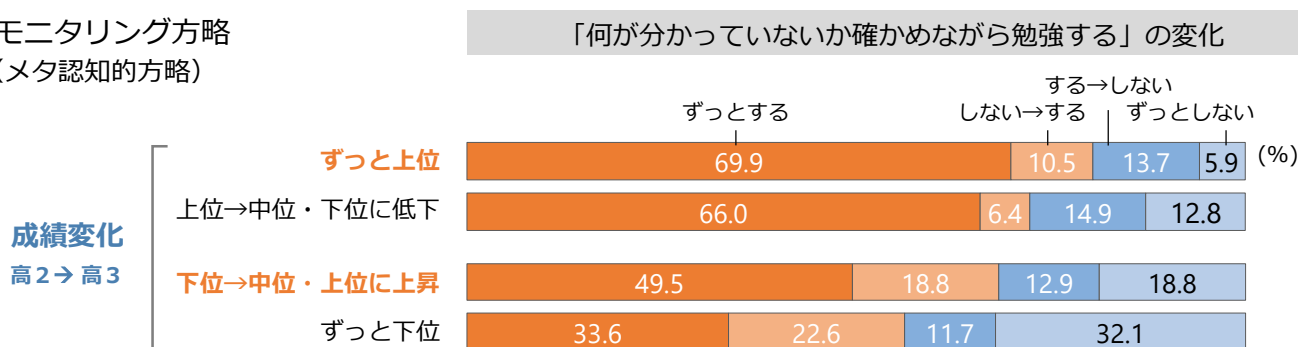
① 調整方略

（メタ認知的方略）

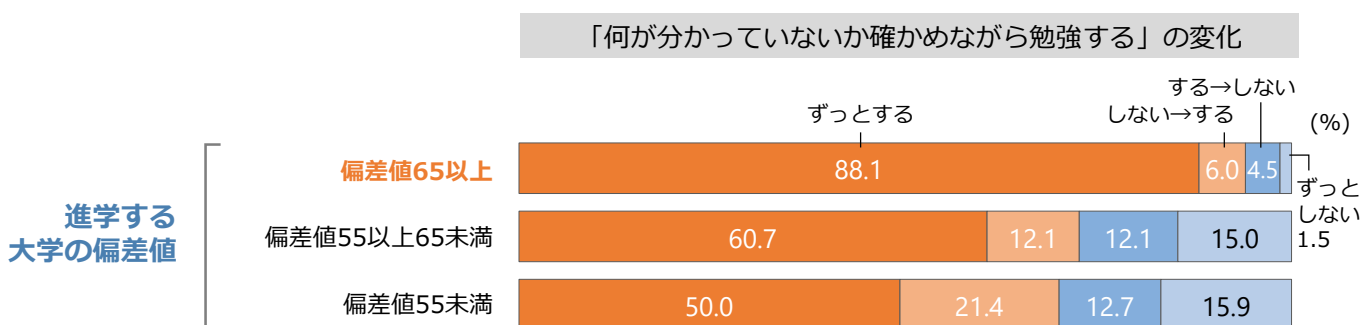


② モニタリング方略

（メタ認知的方略）



図Ⅱ-3-4 勉強方法の変化（進学する大学の偏差値別）



[注1] 勉強方法は、「よくする」「ときどきする」と回答した子どもを「する」、「あまりしない」「まったくしない」と回答した子どもを「しない」として、高2→高3の変化をみた（図Ⅱ-3-3～4）。

[注2] 偏差値の分類はP.5の[注2]参照。

# 高校生活と進路に関する調査2018



## 調査企画・分析メンバー

### プロジェクト代表者

石田 浩（東京大学社会科学研究所教授）／ 谷山 和成（ベネッセ教育総合研究所所長）

### プロジェクトメンバー

耳塚 寛明（お茶の水女子大学教授）

秋田 喜代美（東京大学教授）

松下 佳代（京都大学教授）

佐藤 香（東京大学教授）

藤原 翔（東京大学准教授）

大崎 裕子（東京大学特任助教）

小林 一木（ベネッセ教育総合研究所副所長）

邵 勤風（ベネッセ教育総合研究所  
初等中等教育研究室室長、主席研究員）

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）

橋本 尚美（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）

岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）

野崎 友花（ベネッセ教育総合研究所研究員）

渡邊 未央（ベネッセ教育総合研究所研究スタッフ）

※所属・肩書きは、2018年3月時のものです。



## 研究プロジェクトのWEBサイトのご案内

研究プロジェクトや本調査に関しては、以下のWEBサイトに掲載しています。

東京大学社会科学研究所：<https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/>

ベネッセ教育総合研究所：<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>

### 「高校生活と進路に関する調査2018」ダイジェスト版

発行日：2019年12月20日 発行人：谷山 和成 編集人：高岡 純子  
発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。